

出雲市

山持 ざんもちいせき 遺跡

「シリーズ しまねの遺跡 発掘調査パンフレット」は、発掘調査が行われた島根県内の遺跡をとりあげ、最新の発掘調査と研究の成果をわかりやすく紹介する冊子です。発掘された遺構や出土品の説明とともに、地域の歴史における遺跡のもつ意味や重要性を掘り下げて解説します。この巻では、1980年以降、学校建設や下水処理施設の建設、国道431号東林木バイパスの改築などの道路建設に伴い発掘調査が行われた出雲市山持遺跡をご紹介します。



山持遺跡の位置と環境

遺跡の概要

山持遺跡（島根県出雲市西林木町、矢尾町、日下町）は、出雲平野の北、北山山系の南麓にあります。遺跡は、斐伊川の流れによって形成された自然の高まり（自然堤防）の上にあり、その範囲は、南北約0.5km、東西約2kmに広がると考えられます。発掘調査では、縄文時代から江戸時代までの遺構や遺物が発見されており、ここが縄文時代以来、人々の暮らしの場として開発され、さまざまな形で利用してきた様子がうかがえます。なかでも、弥生時代と古墳時代には、たくさんの人々が居住する大規模な集落が営まれました。また、平安時代には、大規模な土木工事によって築かれた道路が敷かれており、人々が行き来する主要道路があったと考えられています。



弥生時代の出雲平野と主な遺跡

出雲平野の弥生時代の遺跡

縄文時代後期～晩期、出雲平野を貫流する神戸川と斐伊川は、上流から下流へと大量の土砂や三瓶山の火山噴出物を押し流しました。これらは下流に広がっていた湿地や内湾を埋め、そこに出雲平野が形成されました。出雲平野で発見されている大規模な弥生時代集落の多くは、斐伊川と神戸川の河川堆積物の上に形成された自然の高まりを利用して営まれています。また、弥生時代の斐伊川の本流は、西流し、日本海につながる内湾へと注いでいました。こうした環境のもと、山持遺跡には人々が暮らし始め、やがて大規模な弥生集落が営まれるようになりました。

（※出雲平野の弥生時代の主なみづ 提供：出雲市弥生の森博物館）

山持遺跡と出雲平野の変遷

ここでは、過去2万年間の出雲平野の変遷と、どのような場所に山持遺跡があったのかを説明します。（図中の●が山持遺跡の位置）



← 旧石器時代(20,000年前)

この時代は氷期の最終期にあたり、海面は現在よりも約140m低かったです。海岸線は大きく後退し、陥没へと続く陸橋がありました。出雲平野の東西には東西へのびる谷があり、西へ向かって川が流れていました。



← 縄文時代前期(約6,000年前)

約10,000年前から始まった温暖化により海面は上昇し、大社湾から東へ向かって古宍道湾が形成されました。この時代には鹿児島県の南の海中で噴火した鬼界カルデラの噴火によって「アカホヤ火山灰」が出雲平野にも降りました。



← 弥生時代～奈良時代(約2,000～1,300年前)

縄文海進は縄文時代後期（約3,500年前）には海退へとなり、弥生時代や古墳時代には斐伊川や神戸川によって運ばれた土砂がしだいに堆積し、陸地が広がります。奈良時代には小海進によって神門水海が広がりました。



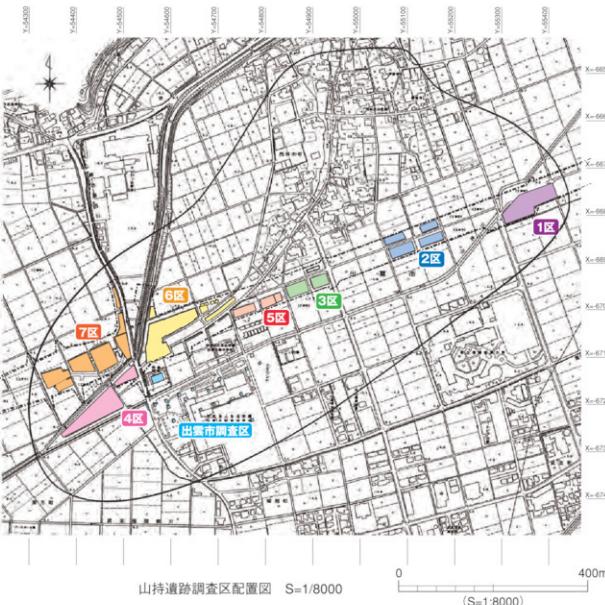
← 現在の出雲平野

神門水海へ注いでいた斐伊川は、寛永16（1639）年の洪水以降は東へと流れを変え、直接宍道湖に流れるようになります。そして17世紀以降盛んに行われた鉄穴流によつて大量の土砂が斐伊川に流れ、三角州を成長させ宍道湖西部は急速に平野化していき、現在の出雲平野ができるようになりました。斐伊川は氾濫のたびに流路を変えましたが、流路に沿って微高地ができ、集落を営む場もできました。

参考文献：「道路が語る古代の出雲・出雲平野の歴史を中心とした、出雲市教育委員会、1997. 10.11 頁

山持遺跡の調査歴

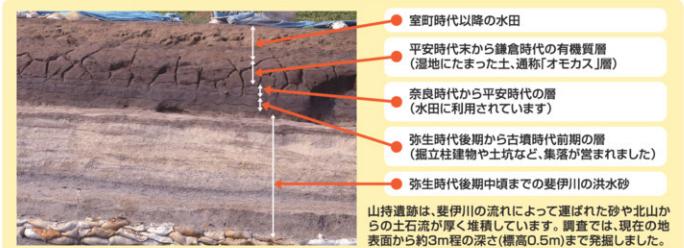
山持遺跡の発見は、昭和37(1962)年、郷土史家の新宮元栄氏によって土器が採集されたことにさかのぼります。その後、昭和55(1980)年、出雲女子高等学校(現出雲北陵高等学校)建設に伴い、出雲市教育委員会によって発掘調査が行われたのが最初の発掘調査です。このころは「山持川岸遺跡」と呼ばれ、遺跡の広がりは現在よりも狭いものと考えられていました。平成13(2001)年には、一般国道431号道路(東林木バイパス)建設に伴い範囲確認調査が行われ、山持川岸遺跡がさらに広い範囲におよぶことが確認され、遺跡名を「山持遺跡」と改称しました。その後、平成14(2002)年～平成22(2010)年にかけて島根県教育委員会(島根県埋蔵文化財調査センター)によって東林木バイパス建設に先立つ発掘調査が行われたほか、出雲市教育委員会によつても発掘調査が行われています。



土層は語る

遺跡に堆積した土や砂礫には、その場所が過去にどのような環境にあったのか、どのような災害に見舞われたのか、また、人々がどのように土地を開拓してきたのかといったことを知る手がかりが残されていることがあります。

平成14(2002)年から平成22(2010)年まで島根県教育委員会が行った山持遺跡の発掘調査では、東西1kmに及んだ長い調査区の全てにおいて、古代末～中世の薄い腐食土層が確認され、この時期、一帯には広い湿地が広がっていたことがわかります。また、江戸時代に斐伊川の洪水が何度も押し寄せた痕跡や、古代には水田耕作が行われた痕跡などもわかります。



噴砂(液状化現象)の痕跡

噴砂(液状化現象)とは、地震の衝撃で砂の地盤が流れやすくなる現象のことです。地震の規模が大きいと、液状化のため建物が被害を受け、砂が地上に噴出し、噴砂となることがあります。この写真は、山持遺跡6区の土層断面に現れた噴砂の様子で、弥生時代以前の堆積層(13層)中の噴砂です。



弥生時代・古墳時代の山持遺跡

山持遺跡の中枢域—6区—

6区では、弥生後期中頃の斐伊川の大洪水により一時壊滅的な被害をこうあります。その後に復旧し、山持遺跡の中枢域として多種の遺構・遺物が確認されています。遺構としては、5種の建物跡が検出されており、そのうち3棟は布掘建物と呼ばれる、特殊な建物によって占められています。布掘建物は弥生時代後期から古墳時代初頭にはば限定される掘立柱建物で、柱を立てる際に溝状の掘方をもつものです。山持遺跡の布掘建物は軟弱な地盤に作られたため、建物が沈下しないよう柱の下に沈下防止の礎板や枕木が敷かれている珍しい例です。



6区⑥遺構配置図

山持遺跡の終焉—7区—

7区は、山持遺跡の西端に位置します。弥生時代後期の遺構・遺物もありますが、6区に比べるとまばらで、古墳時代中期の遺物が目立ちます。特に古式須恵器は比較的まとまった量が出土しております。出雲平野の遺跡では希少な資料です。しかし、4区の古墳時代前期のような大量の土器群や密集した建物跡は認められず、集落は一気に衰退へと向かっています。続く古墳時代後期の遺構・遺物は極めて乏しく、600年以上続いた山持遺跡の集落はいよいよ墓を閉じることになります。



7区出土の古式須恵器

新たなムラの始まり—4区—

4区は、6区の西側に位置する調査区で、山持川沿いの微高地上に位置しています。遺構・遺物の大半は古墳時代前期から中期のものです。古墳前期には大溝が掘削され、中からは大量の土器が出土しました。掘立柱建物も大半は古墳時代前期のもので、山持遺跡の中枢域はこの時期に区へ移動したと推定されます。続く古墳時代中期には井戸や土塹が存在しますが、古墳時代前期ほどの密集度ではなく、集落は衰退へと向かいます。

4区の古墳時代前期集落

4区の古墳時代前期の大溝

山持遺跡は東から西へ流れる山持川沿いに広域に展開する大規模な集落遺跡です。これまでの調査で、遺跡の変遷がおおよそわかってきました。

弥生時代中期～後期の山持遺跡は、現在の出雲北陵高等学校の東側に居住域があり東側のやや上流に祭祀場または墓域があつたと推定されます。2世紀初め頃には、遺跡の南側を流れる斐伊川が大洪水を起こし、集落の西側は洪水砂で埋没してしまいました。しかし、その後に集落は洪水砂の上に再建設され、2世紀後半から3世紀前半にかけて集落は最盛期を迎える、朝鮮半島をはじめとする各地の物資が集まる交易拠点として繁栄しました。また、この時期に集落の一角では、木製品や玉作り、水銀朱、漆などの各種の手工業生産工房もあったようです。

弥生時代後期の祭祀場—1区—

1区では、自然河道中に一括して投棄された大量的土器や木製品が見つかっています。土器の中には吉備から運ばれた特殊土器と呼ばれる埴輪祭祀専用の土器やその模倣品が多数見つかっています。また瀬戸付近には集石や建築部材が一括して投棄されているところもあり、この付近が水辺の祭祀場であった可能性も考えられます。また、吉備の特殊土器は通常は埴輪祭祀に使用される土器であることから、付近には墓域があつた可能性も想定されます。



1区から出土した土器群

弥生時代後期の居住域の縁辺部—3区—

3区では弥生時代の山持川と想定される自然河道や溝、土塹などが検出されています。河道中からは弥生時代中期後業～後期後業(紀元前1世紀～紀元世紀)の土器が大量に出土しています。これらの弥生土器は1区とは異なって祭祀用土器は乏しいことから、通常の集落で使用した土器を順次発案していったものと考えられます。土器群は河道南側縁辺部に集中することから、当時の居住城は3区の南側に広がっていたものと想定されます。このほか、河道中からは小規模な壙状の施設も見つかっており、集落での取水に用いられたものと想定されます。

大量に投棄された土器の中には、北部九州系などの土器のほか、勒島式土器と呼ばれる朝鮮半島の無文土器が比較的まとめて出土しました。勒島式土器は九州周辺以外ではほとんど出土例がなく、楽浪土器とともに当遺跡の性格を特徴的に物語っています。



3区の自然河道中の土器出土状況

3区の自然河道中の堀

弥生時代・古墳時代の遺構

山持遺跡は膨大な量の遺物と比べれば、調査条件の制約もあって、遺構はあまり見つかっていません。そのわり、地下水位が高いことから、通常の集落では見つからない柱材や建物の基礎構造を構成する部材などがよく残されており、この時期の建物を検討する上で貴重な資料を提供しました。建物跡は現状では掘立柱建物のみで、通常の集落にみられる堅穴建物は見つかっておらず、水辺に立地する当集落の特質を端的に物語っています。

布掘建物跡 -6区-

布掘建物とは、掘立柱建物の一種で、柱を立てる穴を溝状に一度に掘り込むものです。特にSB01は地盤沈下を防ぐための礎板や枕木がよく残っており、弥生時代の建築技術を知るうえで一級の資料です。SB01は、西側柱が傾いていたにもかかわらず他の柱は直立していたことから、通柱式ではなく乗柱式建物と考えられ、重量に耐える倉庫として利用されたと推測されます。また柱を立てる穴では、赤い顔料が付着した石が出土し、祭祀行為を行なったことが想定される点、礎板や枕木など地下構造が入念な作りの点、柱材がすべてカヤ属の材を使用している点などから、特別な性格の建物であった可能性も想定されます。



6区の布掘建物跡 (SB01)



6区の掘立柱建物跡 (SB03)



6区布掘建物の (SB01) の地下構造

地盤沈下防止のための礎板や枕木など様々な工夫がなされています

大量的土器だまり

各調査区では、土器だまりが数多く検出されました。土器だまりの中には、完形品が一括して投棄された状態のものが多く、ただの廃棄ではなく、何らかの祭祀行為によるものも数多く含まれるものと考えられます。



完形品がまとめて出土した土器だまり (6区)

弥生時代後期の貯木施設 -6区-

6区では、溝から製作途中中の未成品がまとめて検出され、製作途中の未成品を水没させて一時保管する施設と考えられます。このような貯木施設は、県内では弥生時代前期の例は比較的多く見つかっていますが、弥生後期の事例としてはきわめて稀です。



溝内の木器未成品貯蔵施設 (6区SD01)

環日本海の時代 一山持遺跡をめぐる対外交流

山持遺跡からは、朝鮮半島から西部日本海沿岸地域の土器がこれだけまとまっている遺跡は九州以外ではほとんどありません。日本海沿岸地域は、島嶼部や入江が多い瀬戸内と異なり、船の構造や気象条件さえ整えば、比較的遠隔地同士の交渉が可能でした。鉄器など他の遺物を見ても、弥生時代後期の日本列島と朝鮮半島との交流の中心は日本海沿岸地域にあり、山持遺跡は、このような弥生時代後期の日本列島における表玄関の一つとしての役割を担っていたのです。



くろきわらぎ
東洋土器

(弥生中期末～後期中葉)
前面には切妻型を見られます。東洋土器の完形品は九州を含めて多くわめて稀です。このほか、窓の小片が約10枚出土しています。



さんくわらぎ
三輪土器

(弥生後期末～古墳前期)
東洋土器を模倣して朝鮮半島南部で製作された土器です。左と同様に朝鮮半島南部で製作された土器ですが、取っ手や穿孔の特徴から韓系の證と考えられます。



さんくわらぎ
三輪土器

(弥生後期末～古墳前期)
左と同様に朝鮮半島南部で製作された土器ですが、取っ手や穿孔の特徴から韓系の證と考えられます。



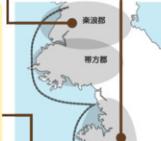
だんのくろまるわらぎ
丹後・但馬土器(弥生後期)

山持遺跡からは丹後・但馬土器の資料はごくわずかでここに示したものもある資料にすぎません。その点で、当地の土器がまとまって出土している背谷上寺地遺跡は対照的なあり方を示しています。



くろきわらぎ
東洋土器

(弥生中期末～後期)
朝鮮半島土器とは、朝鮮半島の無文土器の一型式です。これは主力からみて朝鮮半島からの輸入品の可能性が高いと考えられます。他の朝鮮半島土器とははっきり区別が付くように対し、これは煮引きの要である点が注目されます。もしかすると朝鮮半島からの住民が山持遺跡に居住していたかもしれません。



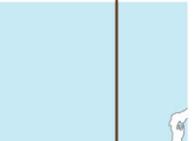
さんくわらぎ
三輪土器

(弥生後中期～古墳前期)
朝鮮半島南部で製作された土器です。左と同様に朝鮮半島南部で製作された土器ですが、取っ手や穿孔の特徴から韓系の證と考えられます。



さんくわらぎ
三輪土器

(弥生後中期～古墳前期)
左と同様に朝鮮半島南部で製作された土器ですが、取っ手や穿孔の特徴から韓系の證と考えられます。



だんのくろまるわらぎ
丹後・但馬土器(弥生後期)

山持遺跡は、丹後・但馬土器の資料はごくわずかで、その大半は祭壇用の壺や器台によって占められています。山持遺跡では、2次自然河造で作られた長周囲や大型の壺が出土しています。吉備系土器は通常の煮炊用の壺はごくわずかで、その大半は祭壇用の壺や器台によって占められています。吉備系土器の内容物を入れるシルエットとして使用された可能性が高と想われます。



くろきわらぎ
吉備系土器(弥生後期)

北九州系土器
(弥生中期末～後期中葉)
北九州系土器は、山持遺跡では中期末に出現し、後期中葉にピークを迎え、後期末にはほとんど見られなくなります。その半は中型の内で、内容物を入れるシルエットとして使用された可能性が高と想われます。



さんくわらぎ
近江系土器(弥生中期末～後期)

近江系土器
(弥生中期末～後期)
近江地方で製作された受持口縁の壺です。近江系土器は西日本では非常に珍しいですが、朝鮮半島の動植物からも出土しています。日本と交易網において当地が担った役割を考えるうえで興味深い資料です。

弥生時代・古墳時代の遺物

山持遺跡の出土品は、弥生時代から古墳時代のものが最も量が多く、内容も多彩です。弥生土器や土師器などの土器、ジョッキや杓子などの木製品、玉類、朱や漆の精製に関する土製容器などがあります。



弥生時代後期の土器

甕や壺の口の部分に段があります。



古墳時代器前期の土師器

大溝からたくさんの中器が完全な形で見つかりました。



ジョッキ形容器



杓子木製品

鉢掛

櫛木製品

多彩な木製品とその未製品

山持遺跡は、水が當時湧くような環境であったため、他の遺跡では乾いて無くなってしまう木製品がそのままの形で見つかりました。

木製品には溝や水田で使う鍬や鋤、椀や桶形の容器、椅子のような調度品、建物の部材などが見つかっています。また、鍬や杓子の作りかけの出土品もあり、山持遺跡の中で木製品の生産が行われていたことがわかります。



6区出土のさまざまな玉類

古墳時代の玉類

山持遺跡では古墳時代前期から中期(3~5世紀)の玉類が見つかりました。勾玉の他に管玉、ガラス小玉があります。管玉は松江市玉湯町で採れる碧玉を用いており、この未製品が出土したことから山持遺跡でも玉作りが行なわれていたことが分かりました。また、赤褐色のガラス小玉は、南インドから東南アジアにかけての地域で作られたものであり、当時の山持遺跡の人々がどのような経緯で入手したのか、興味のわくところです。



ガラス小玉



管玉未製品



水銀朱精製用の土器、石器

表面を赤く塗っている土器がありました。これは分析の結果、水銀朱(HgS)であることが分かりました。また、土器の内側や石器にも水銀朱が付いているものがありました。これらは土器に塗布するために水銀朱を石器で砕くなど調整した痕跡であるものと考えられます。



漆採集用の容器

山持遺跡からはコップのような形をした土製品が見つかりました。中に黒い塗料のようなものが付いていました。この黒いものは漆であり、この土製品は漆の採集容器であることが分かりました。出雲市内の他の遺跡からもこの漆採集容器は見つかっています。漆は容器や武器の表面に塗料として使われていました。